

機関番号：14701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21730696

研究課題名(和文) 国語科教師の専門知の発展を促す授業批評会のあり方に関する研究

研究課題名(英文) Examinations on Lesson Studies in order to Develop Japanese Language Teachers' Professional Knowledge Inherent in Reflections on Demonstration Classes

研究代表者

丸山 範高 (MARUYAMA NORITAKA)

和歌山大学・教育学部・准教授

研究者番号：50412325

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、(1) 国語科教師が、研究授業の一環として行われる授業批評会を介して、授業づくりのための教職専門知を構築する、教師としての学習過程を解明できたことと、(2) 現職教員研修としての授業批評会の今後の可能性を考察できたこと、である。本研究の意義は、先行研究のような脱文脈化・抽象化された結果理論ではなく、授業改善のための教職専門知を構築するに至る教師の学習モデルを提示できた点に見出される。なお、具体事例に関わる調査分析結果は、査読あり学会誌を含め複数の学術論文として発表するとともに、全国規模の学会での口頭発表も行った。

研究成果の概要(英文)：The results of this examinations are: (1) to elucidate Japanese language teachers' learning processes of constructing professional knowledge inherent in reflections on demonstration classes(2)to research the possibility of "Japanese Lesson Study".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：国語科教育、教師教育、教師の語り、授業研究、教員研修、ナラティブ・アプローチ、ライフストーリー

1. 研究開始当初の背景

授業改善のための授業研究は、どの教師、どの教室にも普遍的に適用できる授業理論や教授技術を開発する研究から、個々の教師の内面を対象とした、教師の「知識」や「思考」などに関わる教師研究への転換が図られている(佐藤：1999)。こうした、研究の視

座の転換の背景には、「技術的熟達者」に対する「反省的実践家」としての教師による省察にこそ、教職専門性を見出そうとする考え方があ(シヨーン：2001)。また、教室の現実として、教師にとって外在する理論をトップダウンで提供するのではなく、教師が自分の授業を振り返り自身で課題解決を図ら

なければ、多種多様すぎる個々の教室に応じた授業改善は実現され得ないという事実がある。

国語科教育研究においても、澤本他(1996) 藤原他(2004) 細川(2005) 藤原他(2006) (2007)により、国語科授業に関する教師研究の成果が蓄積されている。これらのうち、藤原他(2004) 細川(2005) 藤原他(2006) (2007)らの研究は、それぞれ、特定の教師を対象に、個別具体的な教師の「知識」や「思考」のあり方を明らかにした。しかしながら、これらの研究は、個々の教師が保有する「知識」や「思考」が、他の教師に開かれ交流し合うことによって更新されるところまでを研究対象としてはいない。また、澤本他(1996)の場合、「集団的リフレクション」「対話的リフレクション」において、教師間での協議がなされているが、そこで協議された内容は、当該授業の実践方法・技術についてのものに限られる。教師が保有する授業づくりのための「知識」や「思考」の交流や更新を伴う協議ではない。つまり、教師が保有する「知識」・「思考」が開かれ交流され鍛え上げられる授業批評会を対象に据え、国語科教師の授業実践の拠りどころとなる「知識」・「思考」を解明した研究は未だ不十分な状況にあると言える。

【文献】

- 佐藤学(1999)「カリキュラム研究と教師研究」安彦忠彦編『新版カリキュラム研究入門』勁草書房 pp. 163-169.
- ドナルド・ショーン著、佐藤学・秋田喜代美訳(1983原著)(2001訳)『専門家の知恵』ゆみる出版
- 澤本和子・お茶の水国語教育研究会(1996)『教師のための国語科授業研究 わかる・楽しい説明文授業の創造—授業リフレクション研究のススメ』東洋館出版社
- 藤原顕・荻原伸・松崎正治(2004)「カリキュラム経験による国語科教師の実践的知識の変容—ナラティブ・アプローチを軸に—」『国語科教育』第55集 全国大学国語教育学会 pp. 12-19.
- 細川大輔(2005)「国語教育におけるアクション・リサーチの可能性—実証主義からのパラダイムの転換を—」『国語科教育』第58集 全国大学国語教育学会 pp. 34-41.
- 藤原顕・遠藤瑛子・松崎正治(2006)『国語科教師の実践的知識へのライフストーリー・アプローチ—遠藤瑛子実践の事例研究—』溪水社
- 藤原顕・今宮信吾・松崎正治(2007)「教科内容観にかかわる国語科教師の実践的知識—詩の創作の授業を中心とした今宮信吾実践に関する事例研究—」『国語科教育』第62集 全国大学国語教育学会 pp. 59-66.

2. 研究の目的

本研究の目的は、国語科「読むこと」の領域の授業に関わって、(1) 国語科教師が授業批評会を拠りどころに授業づくりのための教職専門知をどのような学習過程を通して構築するのか、事例研究として解明すること、(2) 現職教員教育としての授業批評会の今後のあり方について考察すること、にある。

公開授業後に行われる授業批評会では、教師による発問や指示や説明といった教授技術そのものの適否が、授業の文脈から乖離した状況下で協議されることが多く、教授技術が適用された文脈にさかのぼって当該技術の適否が議論されることは少ない。

そこで、本研究は、個々の教師が経験から培う文脈密着型の「実践的知識(=教職専門知)」(Elbaz:1981)(吉崎:1987)(佐藤:1997)(秋田:2000)という概念に注目し、授業者教師は、授業批評会を拠りどころとしながら授業を省察することによって、どのような教職専門知を構築するに至るのかを解明するのである。

したがって、本研究の成果は、抽象化された結果理論として提示されることはない。つまり、授業改善のための教員研修に臨む国語科教師が、トップダウン方式で提供された脱文脈の抽象理論を機械的に受容するようなことは想定していない。本研究の成果は、研修に臨む国語科教師が、自分の授業の課題を見極め、課題解決の見通しを得る学習の過程(道すじ)を表現したものとなる。

【文献】

- Elbaz, F. (1981) The teacher's "practical knowledge" Report of a case study, *Curriculum Inquiry*, 11(1) pp. 43-71.
- 吉崎静夫(1987)「授業研究と教師教育(1)—教師の知識研究を媒介として」日本教育方法学会編『教育方法学研究』第13巻 pp. 11-17.
- 佐藤学(1997)『教師というアポリア—反省的实践へ』世織書房 pp. 41-42. pp. 172-174.
- 秋田喜代美(2000)「教えるための実践的知識」森敏昭・秋田喜代美編『教育評価重要用語300の基礎知識』明治図書 p. 223.

3. 研究の方法

本研究では、「反省的实践家」としての国語科教師が、授業批評会における同僚教師の批評を拠りどころにしながら自分の授業を省察した結果、授業づくりのための「実践的知識(=教職専門知)」を構築するに至る過程を解明する。ここでは、教室で生起する可視化された事象というよりもむしろ、可視化された事象の意味づけに関わる可視化されない教師の意図=見識の解明が重視される。しかも、そこで解明された教職専門知は、普

遍的な唯一絶対のものではなく、その知を参照する他の教師によって修正される可能性をはらんだものとして提示される。

したがって、研究の方法としては、教師の語りにも注目したナラティブ・アプローチによるライフストーリー法を採用する。教師の語りからは、「教師が授業など教育実践の積み重ねのなかで形成しつつ、ある実践のなかで駆使している経験的な見識」（藤原：2007）を明らかにすることができるからである。また、教師の語りには教職人生＝ライフが反映されており、「ライフストーリー研究とは、（中略）ナラティブ（語り・物語）を通して世界や人間をみていくという（中略）＜もの見かた＞が含まれている。（中略）したがって、この研究法を学べば、（中略）自分自身やほかの人びとや周りの環境を主体的に生成的に変えていく知恵としての＜もの見かた＞や＜方法論＞を学ぶことができ」（やまだ：2005）る、つまり、よりよく修正される可能性が開かれているのである。

研究は事例調査によって進めた。近畿・中国・九州地区に勤務する複数の中・高等学校国語科教師を対象に、研究授業および事後に行われる授業批評会を観察した後、授業の省察に関わるインタビューを実施した。対象教師の選定にあたっては、幅広い年代の教師の事例が収集できるよう配慮した。

【文献】

藤原 顕 (2007) 「教師の語り—ナラティブとライフヒストリー」 秋田喜代美・能智正博 監修、秋田喜代美・藤江康彦編『はじめての質的研究法 教育・学習編』東京図書 p. 337.

やまだ ようこ (2005) 「ライフストーリー研究—インタビューで語りをとらえる方法」 秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学編『教育研究のメソドロジー』東京大学出版会 p. 192.

4. 研究成果

本研究の意義は、授業改善に関する、国語科教師による教師としての学習過程を解明した点に見出される。先行研究では、授業改善のための過程ではなく、結果としての抽象化・脱文脈化・定式化された理論が提示されてきた。そのような中で、本研究は、いわば課題解決のための理論・技術ではなく、課題解決に至る過程モデルを提示できた点が特筆される。

以下、授業批評会を介して、国語科教師が教職専門知をどういった過程で構築したのか、具体事例を取り上げつつ説明するとともに、現職教員研修としての授業批評会の今後のあり方について考察する。

- (1) 授業批評会を切りどころに国語科教師の教職専門知が構築される過程
インタビューによる事例調査研究の結果、

授業者である国語科教師は、授業批評会における同僚教師の批評を受容することによって、①自分の授業をそれまでとは異なるより幅広い文脈の中に位置づけて省察できる、②実践をベースとした自分らしい国語科指導過程論を構築できる、③学習者の主体的な学びを保障するための目標設定と発問の組み立てとについて実践に生きる専門知が構築できる、ことが明らかになった。

これら3点の教職専門知が構築される過程は、以下の通りである。

- ① 自分の授業を幅広い文脈の中に位置づける

ある中学校国語科教師は、授業批評会において、自分とは異なる授業観を持つ同僚教師から、自身の授業展開を相対化する批評（異なる授業展開をすべきではないかという批評）を受ける。

これに対して当該授業者教師は、確かに同僚教師の指摘することは納得できるが、それも授業が置かれた文脈しだいであり、どの授業にも普遍的に当てはまることではないと語る。

そのようにして、この教師は、授業展開に関わる教授技術について、その技術そのものだけを吟味したり、また、硬直化した教師の信念でもってその技術の適否を判断したりする行為はふさわしくないという認識を獲得する。そして、それ以前の実践歴、学習者の実態、教材の特質といった授業構成要因を丁寧に見取りながら、教授技術の適否を判断していくことの重要性を認識する。

これらのことから、この中学校教師は、自身の授業を相対化する同僚教師の批評に向き合うことによって、授業展開に関わる教授技術の可能性について、その技術を取り巻く様々な状況の文脈の中で個別具体的に省察するよう促されたと総括できる。

- ② 実践ベースの国語科指導過程論が構築できる

ある高等学校国語科教師は、1時間1時間の授業が断片的で系統性がなく、重要な学習指導事項を絞り込んでのメリハリのある学習活動をさせることができず、教材文の読み深めもままならないといった課題を抱えていた。授業批評会で提示された数々の同僚教師の批評は、こうした課題に沿って取捨選択された。つまり、課題解決に結びつかない批評は捨象され、受容された批評も課題解決につながるよう批評の文脈が発展させられた。

この事例から、指導過程上の課題を見極める、同僚教師の批評の中から課題解決に資する批評を選択する、選択した同僚教師の批評の文脈を課題解決に向けて転換・発展させる、改善指導過程の見通しを獲得する、という教師の授業づくりのための学習過程が明らかになった。

これは、先行研究で示された個々の指導過程論の中から適当なものを選択しつつ授業改善に資する指導過程を模索するというものではなく、あくまで自分の授業実践をベースに、その授業実践を実際に参観し授業の文脈を共有した同僚教師の批評を手がかりとしつつ、授業改善に資する指導過程を構築するというものである。つまり、既成理論の適用をベースとした、これまでの教師の授業改善の方向を、自分の授業実践の省察をベースに授業改善を図る方向へと、転換を示唆した研究結果が示されたことになる。

③ 目標設定と発問組み立てに関わる実践的専門知が構築できる

ある高等学校国語科教師は、授業批評会における同僚教師の批評の文脈を直接受容するのではなく、その同僚教師の文脈を自分にとって意味ある文脈へ転換させて専門知を構築した。

この事例において、同僚教師は、授業者教師と学習者との学習目標に迫るコミュニケーションの妙を観察した結果、授業者教師がどのような方法で学習者を指名しているのかという、可視化されない授業者教師の意図を明らかにすべく、質問の形で批評を提示した。

それに対して、授業者教師は、学習者指名の方法ではなく、いかに全学習者を授業に集中させるか、そして、そのために国語科教材文をどう分析し、何を学習目標とし、発問をどう組み立てるか、に関して、インタビュアーの問いかけに促されつつ、実践に生きる専門知を構築したのである。

一連のインタビューを通して構築された、この授業者教師の実践的専門知は、「全学習者の主体的学習状況」「教師が教え学ばせる目標」「目標に至る発問」といった3要素によって構成されていることが解明された。このうち、「全学習者の主体的学習状況」を外枠として、その内側に、「教師が教え学ばせる目標」「目標に至る発問」が位置づくような構造体となっている。外枠としての「全学習者の主体的学習状況」を生成するためには、その外枠の中身として「教師が教え学ばせる目標」が中核となり、それら、外枠と中核とをつなぐ媒介的役割を果たすものとして「目標に至る発問」が位置付くという三層構造になっている。つまり、学習者の主体的な学びは、教師が、学習目標と、そこに至る適切な発問を計画し、学習者がその発問を媒介として、その学習目標を目指し積極的に教材に関与した学びを遂行する過程において実現されるべきものだと言うのである。

(2) 現職教員研修としての授業批評会の今後のあり方

授業改善・授業づくりの指針となる教職専門知が構築されるのにふさわしい場として

授業批評会がある。これは、秋田(1998)、坂本・秋田(2008)などによって実証されている。しかしながら、多忙を極める学校現場において、教職員の意思統一のもと、入念な事前準備に基づく組織化された授業批評会を恒常的に実施するのは困難な現実にある。そうした場合の授業批評会では、同僚教師が個々ばらばらに気づきを断片的に述べ合うだけで、実践の文脈を参照しつつ議論を深めていくことは期待できない。ただし、授業批評会を実施するからには、そこでの取り組みを形骸化させることなく、そのかけがえのない成果を、授業者教師はもちろん、できるだけ多くの教師同士で共有・発展させる方策を講じておく必要がある。

そこで、組織化された授業批評会が実施可能な場合と実施不可能な場合とに分け、現職教員研修としての授業批評会のあり方について考察する。

① 組織化された授業批評会が実施不可能な場合

授業者教師の授業の特徴(個性)をある程度熟知している他者をインタビュアーとして仕立て、そのインタビュアーが、授業の文脈と関連させつつ、授業者に、授業批評会における同僚教師の批評を想起させ、その意味を自ら語らせるような場を設定する必要がある。インタビュアーは、授業者教師の授業の特徴(個性)に寄り添いつつ、授業内における学習者の学びの実態と授業批評会で提示された同僚教師の批評とを関連させ、授業者教師がそれら3者の関係性の中で、新たな教職専門知を構築できるような問いかけをするのである。

② 組織化された授業批評会が実施可能な場合

授業者教師の授業の特徴(個性)をふまえ、それに沿った批評ができるよう、同僚教師たちは批評の観点や数を絞って提示できるよう予め調整しておく必要がある。その上で、授業者教師が、授業批評会を経験し、それ以前の教職専門知を更新できるよう、同僚教師は、授業の文脈に沿った形であえて授業者教師の授業を相対化する批評を行うことが適当である。そうすれば、授業者教師は同僚教師の厳選された批評を受け、その批評の意味を、当該授業の文脈のみならず、過去の実践歴、年間指導計画、単元における当該授業の位置などを参照しつつ意味づけしていくことができるはずである。

【文献】

秋田喜代美(1998)「実践の創造と同僚関係」佐伯胖・黒崎勲・佐藤学・田中孝彦・浜田寿美男・藤田英典編『岩波講座 現代の教育 第6巻 教師像の再構築』岩波書店 pp. 235-259.

坂本篤史・秋田喜代美「授業研究協議会での

教師の学習—小学校教師の思考過程の分析—」秋田喜代美・キャサリンルイス編著『授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない』明石書店 pp. 98-113.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

- ① 丸山範高、「国語科教師が授業批評会を抛りどころに構築する実践理論としての国語科指導過程論—国語科教師の授業省察に関わる語りの分析を通して—」、『教育実践学研究』第12巻第2号、査読あり、2011年、pp. 9-20.
- ② 丸山範高、「授業批評会を抛りどころに国語科教師が構築する授業実践知の文脈複合性に関する事例研究—学習者が教材文を読み深めるために必要な教師の働きかけに焦点化して—」、『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』No.21、査読なし、2011年、印刷中
- ③ 丸山範高、「研究授業経験をインタビューとともに振り返ることにより構築される高等学校国語科教師の実践的知識とその意義に関する事例研究」、『和歌山大学教育学部紀要—人文科学—』第61集、査読なし、2011年、pp. 21-30.
- ④ 丸山範高、「国語科授業研究における、授業者教師の授業を相対化する同僚教師の批評の意義に関する一考察」、『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』No.20、査読なし、2010年、pp. 49-55.
- ⑤ 丸山範高、「授業批評会を抛りどころに国語科教師が授業を省察する意義」、『全国大学国語教育学会・国語科教育研究・第118回東京大会研究発表要旨集』、査読なし、2010年、pp. 81-84.

〔学会発表〕(計1件)

- ① 丸山範高、「授業批評会を抛りどころに国語科教師が授業を省察する意義」、全国大学国語教育学会、2010年5月29日、東京都

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丸山 範高 (MARUYAMA NORITAKA)

和歌山大学・教育学部・准教授

研究者番号：50412325

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし